

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23656369

研究課題名（和文） 「生活景」の言語化によるナラティブな景観形成計画技術の構築に関する研究

研究課題名（英文） Research on the contextualization of narrative “Lifescape” for sustainable landscape planning

研究代表者

後藤 春彦 (GOTO HARUHIKO)

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：70170462

研究成果の概要（和文）：

本研究は、今日の都市景観における「生活景」の重要性に着目し、オーラルヒストリー調査成果をもとに、住民のライフヒストリーからパブリックヒストリー、及び空間情報を編纂し、当該地域の「生活景インベントリー」「生活景デジタルマップ」の作成を通じ、地域固有の持続可能な景観規範の形成に向けた景観言語の抽出を行った。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to contextualize a sustainable “Pattern Language” structure based on the concepts of “Lifescape”. An “Inventory of Lifescape Pattern” and “Digital Lifescape Map” was produced through analysis of public history of the region which has been identified using the “Oral History” method. From this process the unique structure of the local landscape was identified as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：都市計画・建築計画

キーワード：生活景、景観形成計画技術、まちづくりオーラルヒストリー、デジタルマップ、パブリックヒストリー

### 1. 研究開始当初の背景

わが国の景観は、右肩上がりの高度経済成長を終えた今、大きな転機を迎えている。かつては近代化のもと同質で単純な成長における開発と保全の構図であったのに対し、縮減社会における景観変化は多様で、しばしば衰退ないし撤退とも表現される。こうした変化に対する持続的な景観規範の提示、及びそのための計画技術の構築は社会的な要請である。

とりわけ各地の農山村地域においては、基礎自治体の財政力の低下、及びそれに伴い相

次いだ市町村合併による公的サービスの質の画一化、コミュニティの弱体化が従来より問題視されており、現行の開発圧力に講じるための保全を前提とする計画技術とは抜本的に異なるものが求められていた。またそれは良好な景観形成のための指針としての機能のみならず、市民自治への足がかりとして、共有可能なコミュニケーションツールへの発展を見据えた手法が望ましい。

これまで研究代表者は、住民の口述記録をもとに地域に積層する有形無形の社会的な記憶を採集し、コミュニティ史として編纂す

る「まちづくりオーラルヒストリー法」を開発し、まちづくりに関する情報の採集・伝達・共有の技術を確立している。こうした背景に基づき、口述史を地域空間上に表現・共有しながら、今後の景観規範として応用していくための技術開発は社会的な要請であるといえよう。

## 2. 研究の目的

本研究は、身近な居住環境、ひいては「生活景」を形づくる要素としての、日常生活の中で受け継がれてきた地域固有の歴史・文化、生活慣習に関する情報が、将来に向けても大きな価値を持ち続けていることに着目した上で、前述の「まちづくりオーラルヒストリー法」を基盤として、地域固有の景観形成を基軸としたまちづくりの将来像を描くための実践的研究である。以下に、本研究の細目的を挙げる。

- (1)：「まちづくりオーラルヒストリー法」に基づく住民の個人史及び空間情報の採集
  - (2)：「パブリックヒストリー」作成による個人史の統合と「生活景インベントリー」による生活景の変遷プロセスの解明
  - (3)：「生活景デジタルマップ」作成による空間情報の構造化
  - (4)：景観言語（計画キーワード）の抽出
- 以上の取り組みから、「生活景」の言語化を通じたナラティブな景観形成計画技術の確立を試みる。

## 3. 研究の方法

本研究の対象地域には、平成の合併を経験した中山間地域のモデルとして宮城県加美町を選定した。平成15年に中新田町、小野田町、宮崎町が合併した当該地域は、我が国の中山間地域にみる、中心市街地の衰退や農村集落の消滅を課題として抱えている。またそれに伴い地域固有の資源が見失われつつある。研究の方法を先述の目的別に以下に示す。

(1)：オーラルヒストリー法に基づく住民の個人史及び空間情報の採集

100人の加美町民を対象に、2人一組、6つの調査チームによる対面インタビューを実施した。生い立ちや現在に至るまでの生活環境の変化等の語りに対し、ICレコーダによる対話の録音、及びタブレット端末の地図アプリにより場所や空間への記録を行った。

(2)：「パブリックヒストリー」作成による個人史の統合と「生活景インベントリー」による生活景の変遷プロセスの解明

調査(1)により録音された音声データのテキスト起こし、及び編集を行い「オーラルヒストリー原本」とする。さらに全被験者の

「オーラルヒストリー原本」をとりまとめ基礎データベースとして「パブリックヒストリー」「生活景インベントリー」を作成し、生活景の変遷を読み取った。

(3)：「生活景デジタルマップ」作成による空間情報の構造化

調査(1)により、タブレット端末に記録された地図データに整理・修正を加えたのち全対象者のデータをGISのベースマップに一

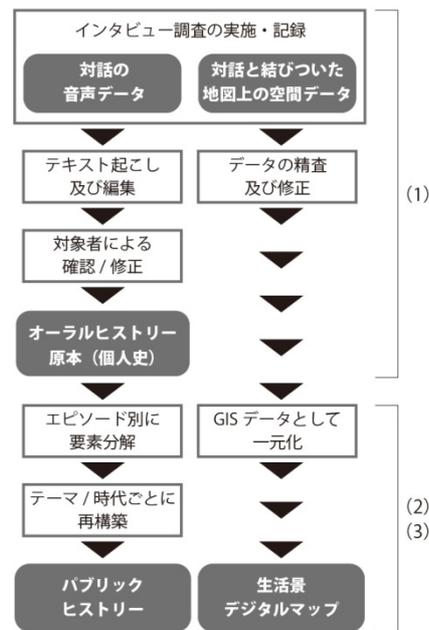


図1 データベース作成までの流れ

※ ( ) 内の数字は本文中に準拠

元化し、「生活景デジタルマップ」を作成した。得られた基礎データベースから、空間情報の性質、及び経年変化を読み取った。

(4)：景観言語（計画キーワード）の抽出  
(2)(3)のデータベースから、景観計画のキーワードとなる要素抽出を行った。またそれと併行し、住民への公開及び議論を促すためのコミュニケーションツールとして活用した。

## 4. 研究成果

本研究の成果を先述の目的別に以下に示す。

(1)：オーラルヒストリー法に基づく住民の個人史及び空間情報の採集

研究の方法に示した通り、加美町民を対象にインタビュー調査を行った。100人の被験者は個人属性や住所（合併前の旧町村）所属等の偏りが無いよう選定を行い、地域に住まう多様な主体によるライフヒストリー（音声データ、空間データ）の採集を行うことができた。

音声データに関しては、対象者ごとにテキスト起こしを行い、被験者による修正・確認を加えた上で「オーラルヒストリー原本」とした。個々のオーラルヒストリーからは、今まで認知されていなかった住民の自発的なまちづくり活動や、子供の頃の遊びや思い出、今日扱われていない、あるいは失われた地域資源、また合併施行に関する意向や合併前後の旧市町村間の軌跡、生活者の視点からみた現状の課題や望ましい地域像に繋がるエピソードを確認することができた。

空間データに関しては、柔軟なスケール調

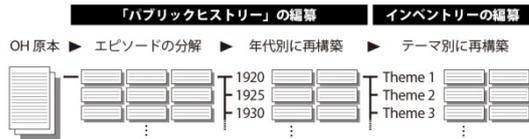


図2 「パブリックヒストリー」及び「生活景インベントリー」編纂の流れ

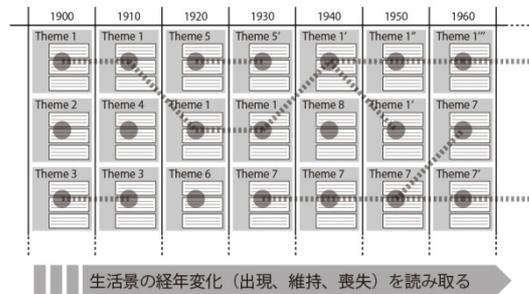


図3 「生活景インベントリー」の時系列整理による生活景の変容の可視化

節及びタッチパネルによる直感的な操作が可能で、可能なタブレット端末を活用することによって、被験者にとってより適切なボリュームの空間情報を引き出すことができた。

(2)：「パブリックヒストリー」作成による個人史の統合と「生活景インベントリー」による生活景の変遷プロセスの解明(図2・図3)

それぞれの「オーラルヒストリー原本」をエピソードごとに分け、時代区分ごとに被験者全員分の全エピソードをひとつの歴史に編み直し「パブリックヒストリー」としてデータベース化した。

また、それぞれの年代においてKJ法によるエピソードの分類を行い、テーマごとに再構築した上で「生活景インベントリー」とした。テーマ別に経年変化を整理し、物的指標による表層的な景観分析で明らかにすることが困難である、住民の日常の生活やなりわい、集落行事等により生み出されてきた生活景の有り様(出現、維持、喪失)及びその具体的要因を確認した。

(3)：「生活景デジタルマップ」作成による空間情報の構造化

被験者ごとの空間データを精査・修正し、GISデータへの変換を行った。その後同一のベースマップに統合し、「生活景デジタルマップ」としてデータベース化した。

データベース化に際し、被験者のライフヒストリーをより正確に空間へ反映するため、以下の2点に留意した。また図4に示すように、各スケール、シェイプごとに空間情報の内容には一定の特徴がみられた。

①スケール

被験者の語りの内容に対し、的確な空間スケールを町全域レベル、街区レベル、近隣レベル、自宅レベルに分類し、口述史記録を行

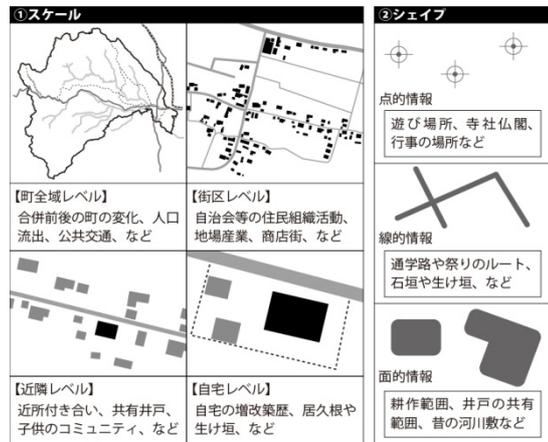


図4 「生活景デジタルマップ」における空間情報

なった。

②シェイプ

被験者の語りの内容の範囲から、空間情報を点的情報、線的情報、面的情報に分類し口述記録を行なった。

(2)と同様に、空間単位の経年変化を分析した結果、具体的には、葉菜山や鳴瀬川といった町内全域にわたる骨格的な自然資源周辺、或いは旧町村単位のまとまりをもった圏域が存在していること、スーパーマーケットの出店や水害、市町村合併や大規模耕地整理といった様々な契機による、ライフヒストリーの集積の量的及び質的变化を確認することができた。

なお、上記の成果に関しては、対面調査ツールとしてタブレット端末を使用したことにより、迅速なデータ収集及び一元化が可能であったことも付記しておく。

(4)：景観言語(計画キーワード)の抽出

(2)(3)によって再整理された「生活景デジタルマップ」と「生活景インベントリー」を活用して、今後の景観計画における地域固有の景観資源となる景観言語を抽出した。更

にこれらの時系列・テーマを考慮し、景観要素間の因果関係（現在の日常生活によって保たれているもの、自治会やNPO等の特別な取り組みによって保たれているもの、失われてしまったもの、異なる景観要素へ変化したもの等）を推察し、その維持管理方法をスケール別、方針別に取りまとめ、地域に根付いた景観形成ガイドラインの素地とした。(図5)。

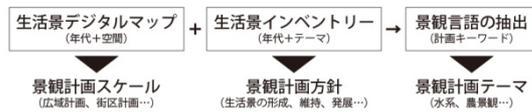


図5 景観計画形成に向けたプロセス

なお、上記の調査分析と併行して、以下の取り組みによって、町民に対して先述した(2)(3)のデータベースの共有、相互交流を図った。

#### ①「景観だより」の発行

オーラルヒストリー調査の報告や、景観に関する情報を記載した新聞を全世帯に配布し、今後のまちづくり活動における有効な情報提供を行った。

#### ②ワークショップ（以下、WS）の開催

加美町全域の住民を対象にWSを開催した。「パブリックヒストリー」はスライド及びパネル展示（テーマパネル）、「生活景デジタルマップ」は概ね1/1000スケールに出力し（ガリバーマップ）、データベースの公開及び共有を図った。WSは参加住民が自由に議論及び投票できる形式を取り、「パブリックヒストリー」のナラティブな情報、「生活デジタルマップ」の空間情報それぞれに対する住民のコメントから、情報が不足しているものや事実と異なるものに対する加筆修正を行うことができた。

#### ③ホームページ（以下、HP）の開設

オーラルヒストリー調査やWSの成果、及びデータベースを限定公開するためのHPを開設し、住民（宮城県加美町）と研究代表者の所属機関（早稲田大学理工学術院）との円滑な情報共有を試みた。

以上の取り組みは、住民の日常生活の中で育まれた景観の有り様に対し、2つの異なるデータベース「生活景インベントリー」と「生活景デジタルマップ」を横断的に活用しながら、地域の文脈に即した景観計画のための景観言語の抽出を試みたものである。

記憶の蓄積から導き出された景観言語は、旧来のハード要素への着目のみでは抽出できないキーワードも含まれており、今後のナラティブな景観計画形成の素地となることが期待される。今回の成果を足がかりとして、今後、地域住民の参画も見据え、持続可能な景観規範の形成に向けた発展的取り組みが

求められる。

また調査記録、及び空間データ統合におけるタブレット端末の有用性を確認できたことも本研究の成果であるといえる。これからの取り組みの中で、こうしたデジタルデバイスの更なる可能性を見出すことも併せ、以降の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

①後藤春彦、都市の中の「時」と「間」、時間に暮らす知恵、City & Life、都市のしくみとくらし研究所、No.103、pp.26-29、2012.03

②後藤春彦、地域遺伝子の発展と継承、日本建築学会総合論文誌、No.10、pp.15-18、2012.01

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

後藤 春彦 (GOTO HARUHIKO)

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：70170462

### (2) 研究協力者

田口 太郎 (TAGUCHI TARO)

徳島大学・工学部・准教授

研究者番号：20367139

佐久間 康富 (SAKUMA YASUTOMI)

大阪市立大学大学院・工学研究科・講師

研究者番号：30367023

佐藤 宏亮 (SATO HIROSUKE)

早稲田大学・理工学術院・助教

研究者番号：10449332